

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 20 日現在

機関番号：13901
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21530795
 研究課題名（和文）デューイ教育哲学における「ヘーゲルの残滓」と「ダーウィニズム」に関する研究
 研究課題名（英文）A Study on “Hegelian Deposit” and “Darwinism” in Dewey’s Philosophy of Education
 研究代表者
 松下 晴彦（MATSUSHITA HARUHIKO）
 名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
 研究者番号：10199789

研究成果の概要（和文）：従来のデューイ研究における観点、デューイは中期の実験主義期により、初期の観念論期から訣別・脱却したという捉え方に対し、本研究では、それを全面否定するものではないが、デューイ思想における「ヘーゲル的な残滓」は、中期以降も認められ、さらに後期の自然主義期にまで及んでいることを明らかにした。具体的には、第一に、デューイ教育哲学の形成期におけるヘーゲルからの影響を、「新心理学」の提唱や倫理的な考察において確認し、第二に、後期（晩年）に結実した哲学的方法としての探究理論においても、ヘーゲル的な弁証法、概念形成（存在・非存在・生成）が、論理学（探究）の操作（推論、事実・観察と観念の相互作用）として実現されていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The conventional consensus among Dewey scholars is that the Hegelian philosophy had a transit influence on Dewey’s intellectual development. They contend that by the late 1890s Dewey discarded the Hegelian idealism. In this study, I explore the new scholarship establishing a Hegelian continuity (deposit) in John Dewey’s ideas regarding the new psychology, ethics, education and the theory of inquiry (logic) from his earliest publications to his middle and later works.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1170,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	800,000	240,000	1040,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3120,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：デューイ、ヘーゲル、教育思想、教育哲学、アメリカ、自然主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来のデューイ教育思想の研究は、一般に、観念論期、実験主義期、自然主義期に区分して捉え、初期の観念論期は、ヘーゲルからの影響を強く受けていたが、実験主義期において、ダーウィニズム(進化論的生物学)と W.ジェームズ(機能主義的心理学)からの影響を契機に、脱却し、その際シカゴ実験学校の実践などを通して、教育思想の完成をみたというものであった。通常のデューイ哲学は、この時期のプラグマティズム、道具主義的な諸概念において理解される。

(2) こうした従来の見解に対し、主として米国とドイツにおいて、19世紀のヘーゲル主義からのデューイの離脱やジェームズからの影響自体を否定するものではないものの、ヘーゲルからデューイに与えたインパクトは、彼の生涯にわたるものであったという解釈が提示されている。具体的には、J.A.Good, *A Search for Unity in Diversity*(2006)や、J.R.Shook, *Dewey's Empirical Theory of Knowledge and Reality*(2000), J.Garrison, *The Permanent Deposit of Hegelian Thought in Dewey's Theory of Inquiry*(2006), D.Barker, *Between Reconciliation and Democracy: Hegelian Themes in Dewey's Philosophy*(2007)などである。これらの研究の背景には、デューイ思想形成に関わる新たな裏づけとして、ミシガン大学時代、シカゴ大学時代、コロンビア大学時代のそれぞれの時期に開講された、デューイの講義録、演習の記録などが、整理され公開されたという事情がある。(デューイ自身が学生に記録をさせたもの、学生が速記録者を依頼したもの、学生による記録とがある)。こうした新たに入手可能となった資料の検討は、一般に認識されてきたヘーゲルか

らの離脱期の1890年代の後半以降も、デューイが引き続きヘーゲル哲学やドイツ観念論に関心を寄せていたこと、またどのように再解釈できるかを模索していたことを明らかにする可能性をもっている。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、まずシカゴ大学時代を中心に、デューイによる講義ノートおよびセミナーの記録などの資料を精査・分析することにより、実験主義時代におけるヘーゲルに対するデューイの格闘と解釈を検討することを目的とした。シカゴ大学時代は、デューイが精神を、有機体と環境との相互作用によって生成される客観的な意識の過程として捉え、他方では、進化論的生物学的メタファーによって、有機体が環境に働きかけて適合していくときの知性の働きに注目した時期である。環境に適応していく能動的な個人という進化論的で生物学的な捉え方と、合理的に再構成された宇宙の実現としての、ヘーゲル的な絶対精神との比較検討を施すことにより、実験主義期におけるデューイ思想形成の新たな特徴づけを試みた。

(2) つぎにデューイのセミナー・講義ノートを論拠とする昨今のデューイ研究をレビューし、ヘーゲルの絶対的観念論からの離脱をはたしたといわれる1900年以降のデューイの諸論文における「ヘーゲルの残滓」を探る考察を行うことであった。特に、ヘーゲルの判断形成とデューイの探究の理論、論理学における相似性を、ヘーゲルの弁証法に対し、デューイの普遍・特殊・個別の峻別(とそれらの間の相互作用)など、両者の違いと相似性について明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究方法の特徴は、ひとつには未公開のデ

ューイ資料の収集とその分析、またこれらを論拠とする最新のデューイ再評価の研究のレビューと分析であり、他のひとつは、これらの読解に基づくデューイ教育哲学・思想の再解釈の提示である。

前者については、サザンイリノイ大学カーボンデールのモリスライブラリにおける The Joseph Ratner Paper and Collection of John Dewey、ミシガン大学の The Bentley Historical Library におけるデューイ講義ノート、シカゴ大学の University Record および Lecture notes の収集である。より具体的には、“Hegel’s Logic, 1896 lecture notes,” “Hegel’s Philosophy of Spirit, 1897 lecture notes by John Dewey,” “Lecture Notes on Theory of Logic 1: Autumn Quarter, 1899-1900,” などである。

後者はこれらの第一次資料にもとに展開されている最新のデューイ研究であるが、次のようなものが分析の対象となった。Thomas C. Dalton, *Becoming John Dewey: Dilemmas of a Philosopher and Naturalist*, Jay Martin *The Education of John Dewey*, Donald J. Morse, *Faith in Life* などである。

4. 研究成果

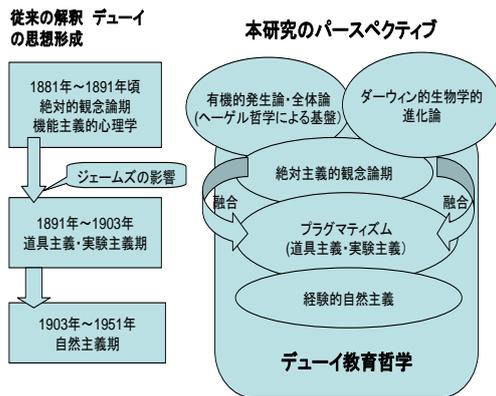
(1) デューイの教育思想、教育哲学については、これまで、『学校と社会』『民主主義と教育』『経験と教育』などの著作から、子どもの興味・衝動の重視、問題解決能力の育成、思考の方法など、デューイが主張したとされる諸命題を取り出し、教育実践へのスローガンや教育方針として唱道するというのが常であった。つまり、理論・主張から、それらの実践への適用という順序であった。しかし、こうした帰結としてのデューイ教育学ではなく、実験主義の枠組みをヘーゲル的な有機体論から再解釈を施すことにより、有機的な存在としての学習者、専門職としての教師、

外からの知識や規制を認めない内的な探究、経験の連続性と再構成など根源的で、包括的、全体論的な理解が可能となると捉えた。

(2) これらの再解釈は、デューイをプラグマティストである前に、ヘーゲル主義者であると捉え直すことを促す。そこで、従来の多義的で分りづらいデューイ的な語彙、有機体と環境との相互作用、場（状況）の概念、教育問題を生物学的に語ること、知性の役割、精神の進化論的な理解などは、ヘーゲル的な運動や弁証法的な枠組みにおいて捉えるときに最も容易な理解が得られるのではないかと結論づけた。デューイにおいては、論理学とは、通常の哲学でいう論理学とはことなり、思考の方法であり、哲学的手法、探究の理論を意味するが、常識を覆すようなデューイの捉え方も、これをヘーゲルの弁証法や判断形成を、デューイ的に自然化したものと捉える必要がある。そこで例えば、私たちは、通常、対象を研究して内容を得ると捉えるが、デューイは探究の過程において、内容を操作して対象を得るのだと考える。探究における題材が思考において主題化され、検証されて対象に転換するのだとされるのである。デューイにとって、探究の対象は、帰結としてあるもので、あらかじめ探究を始める前にそこかしこに存在するものではないのである。このような一見風変わりなデューイ的な言い回しや語彙も、思考操作の前に存在する知識対象を否定していたヘーゲルの概念枠を踏襲したものだと捉えると理解は容易になる。デューイにとって、論理学は探究の理論に他ならないが、探究の理論の二大操作、推論とデータ、事実と観念（アイデア）の相互作用と相互運動についても、ヘーゲルの弁証法、概念形成におけるモーメントである、存在・非存在・生成を、デューイ的に自然主義化して再構成したものと捉えるべきであると結

論づけた。

(3) 本研究は、従来のデューイ教育思想をそのままの形で理解するのではなく、いったんヘーゲル的な変換を経たものとして再解釈することで、より容易で平明な理解を得られるのではないかという提唱を一定の結論とするが、この探究のプロセスを図示すると以下ようになる。



尚、今後の課題としては、デューイが学んだと思われるヘーゲル哲学の実態について、19世紀のアメリカにおけるヘーゲル主義者の理解に遡って探究する必要がある。特にセントルイス運動のデューイの影響は多大なものがあつたと推測され、デューイが生涯にわたり政治哲学的な関心を持ち続け、社会運動においても積極的であつたことの淵源は、19世紀の各種の政治文化運動や結社、学会活動などに求められるのではないかと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

松下晴彦「初期デューイ哲学における倫理的観念論と機能主義的論理学」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育学)第58巻第1号、2011年)27-35頁、査読なし。

松下晴彦「デューイとの対話—デューイ的思索の過去・現在・未来—」(教育哲学研究第101号、2010年)202-206頁、査読なし。

松下晴彦「デューイ哲学における『永遠のヘーゲルの残滓』—初期デューイ思想とヘーゲ

ル主義—」(名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育学)第57巻第2号、2011年)1-10頁、査読なし。

松下晴彦「初期デューイ思想における個と普遍」(近代教育フォーラム第19号、2010年)83-91頁。

松下晴彦「台湾における小中一貫の英語教育の現状と課題」(中等教育センター紀要第10号、2010年)103-119頁、査読なし。

松下晴彦「デューイ教育学におけるカリキュラムの再構築—方法と題材の統一—」(中等教育研究センター紀要第10号、2010年)19-27頁、査読なし。

松下晴彦「『統一性』の希求と『方向性なき成長』不安—ヘーゲルの残滓と進化論的自然主義—」(日本デューイ学会紀要第50号、2009年)205-213頁、査読有り。

〔学会発表〕(計3件)

松下晴彦「デューイ哲学における自然化されたヘーゲル」日本デューイ学会、2011年10月1日、関西学院大学西宮聖和キャンパス。
MATSUSHITA, Haruiko, “Paul Carus’s Early Works: the Philosophy of Monism and Meliorism” Brown Bag Forum, School of Education, July 17, 2010, University of Wisconsin-Madison.

松下晴彦「デューイとの対話—デューイ的思索の過去・現在・未来—」教育哲学会第52回大会、2009年10月18日、名古屋大学。

〔図書〕(計1件)

松下晴彦(共著)『現代アメリカ教育ハンドブック』東信堂、2010年、201頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松下 晴彦 (MATSUSHITA HARUHIKO)
名古屋大学・大学院教育発達科学研究科・教授
研究者番号：10199789

(2) 研究分担者

研究分担者なし

(3) 連携研究者

連携研究者なし